

深い学びを促すアクティブ・ラーニングを広めよう

Invitation to the Active Learning Instructional Strategies that Promote Student Deep Understanding

新潟大教育 土佐 幸子

Niigata Univ., Sachiko Tosa

E-mail: stosa@ed.niigata-u.ac.jp

大学教育の質的転換としてアクティブ・ラーニングの導入が強く求められています。大学の物理講義で具体的にどのような手法をとれば、アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びを助けることができるのでしょうか。具体例を通して紹介します。

1. はじめに

変化の激しい現代社会にあって、単に教えられたことを忠実に再現できるだけでなく、自ら考え行動することによって変化に柔軟に対応し、未来を切り開いていく能力が求められています。平成 24 年に大学教育の質的転換として出された中教審答申¹⁾は、まさにそのような能力が世界的に求められている現在、日本の大学教育の進む方向を問題にしたものでした。その中で、教員の一方的な情報伝達型の講義が一般的な大学教育において、学習者主体の協働的な「アクティブ・ラーニング」を進めることの重要性が大きく取り上げられました。

次期学習指導要領の柱として初等中等教育でも重視されることになったアクティブ・ラーニング²⁾とは一体どんな指導方法なのでしょう。米国では、1990 年代からアクティブ・ラーニングという言葉が高等教育に関して頻繁に使われ始め³⁾、今や多くの教育現場で、アクティブ・ラーニングを実現することは当然のこととみなされています。

2. アクティブ・ラーニングとは？

中教審答申の用語集²⁾には、アクティブ・ラーニングとは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されています。「ペアで意見を交換する」ことや「グループで問題に取り組むこと」のような協働的な活動形態を含めばアクティブ・ラーニングなのでしょうか。あるいはまた、一方的な講義形式でも、学習者が一生懸命に聴いて

考えを巡らしているならば、アクティブ・ラーニングと言えるのではないかという意見もあります。アクティブ・ラーニングとは特定の指導形態を指すのでしょうか。

学校レベルを問わず、アクティブ・ラーニングへの移行は、「教えること」に関する捉え方を根本的に変革することだと考えます。教員は授業をするとき、教師が何をどのように教えるかに集中しがちです。しかし、アクティブ・ラーニングとは、教師中心の「教授パラダイム」から、学習者が何をどのように学ぶかに焦点を当てる「学習パラダイム」への転換を意味します⁴⁾。本講演では、筆者の米国での経験を踏まえ、大学物理授業にアクティブ・ラーニングを取り入れる手法を具体的に紹介します。また、学生の深い学びを実現するために、教員がどのようなスタンスで、どのような手立てを講じることが有効かを、実際の経験を通して考えます。

- 1) 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』用語集 (2012) .
- 2) 中央教育審議会『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)』 (2014) .
- 3) C. Bonwell and J. Eison *Active Learning: Creating Excitement in the Classroom* Jossey-Bass (1991).
- 4) Barr, R. B. and Tagg, J. (1995) "From Teaching to Learning –A New Paradigm for Undergraduate Education" *Change* 27, 12-25.